

成東町真行寺廃寺跡研究調査概報

昭和 58 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

成東町真行寺廃寺跡研究調査概報



昭和 58 年 3 月

財團法人 千葉県文化財センター

序

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究及び普及事業を実施してきました。開発に伴う事前の発掘調査が主たる事業ですが、一方当センター独自の研究事業についても、関係者から充実した業績との評価がなされています。

これまで研究紀要の刊行をはじめ種々のテーマで研究事業を行ってきましたが、本年度は、新たな研究事業の試みとして、当センターの企画、立案による研究発掘調査を実施しました。即ち前年度国庫補助をうけて県教育委員会と当センターで確認調査を実施し、多大の成果を収めた「成東町真行寺廃寺跡」を対象として選定しました。この遺跡は前年度の成果報告でも明らかなように、歴史的にも学術的にも非常に価値の高い遺跡であります。

今回、限られた中での調査ではありましたが、本寺跡の性格をより明らかにする成果をあげることができました。本書が考古学的研究の資料として、広く活用されることを期待してやみません。最後に、調査にあたりさまざまな御援助をたまわった成東町教育委員会及び真行寺地区の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は、財団法人千葉県文化財センターが実施した真行寺廃寺跡の研究発掘調査の報告である。
2. 真行寺廃寺跡は、千葉県山武郡成東町真行寺 565 番地他に所在する。
3. 調査は昭和57年12月10日から12月28日にかけて実施した。
4. 現地における調査と報告書の作成は、当センター研究部長補佐沼沢豊を中心に、調査研究員今泉潔、岸本雅人がこれにあたった。なお本書の執筆分担は以下の通りである。

II・V

沼沢 豊

III-1, IV-1・2

今泉 潔

I, III-2・3, IV-3・4 岸本雅人

5. 調査の実施にあたっては、真行寺地区の土地の所有者をはじめ多くの方々から多大な援助をたまわった。とりわけ山辺進、原巖の両氏には今回も格別の御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。
6. 調査の実施および調査中には、下記の諸機関、諸氏にひとかたならぬ御協力と御教示をたまわった。
成東町教育委員会・成東町文化財審議会・成東町歴史民俗資料館・滝口宏・前沢輝政・多字邦雄・安藤鴻基・須田勉・宮本敬一・大橋泰夫・荻悦久・山路直充・網伸也（敬称略）

目 次

序

例 言

I.はじめに.....	1
II.調査経過.....	4
III.検出遺構.....	8
IV.出土遺物.....	16
V.まとめ.....	24

挿図目次

第1図 真行寺廃寺跡の位置と周辺の古代寺院跡分布図

(1/50,000).....	3
-----------------	---

第2図 トレンチ配置状況および遺構検出状況全体図(1/1,000) ... 5

第3図 遺構配置図(1/200)

8

第4図 金堂南掘立柱建物群実測図(1/80)..... 9

第5図 金堂東掘立柱穴群実測図(1/80)..... 11

第6図 金堂南東側遺構検出状況図(1/80)..... 13

第7図 金堂南東側遺構検出状況図(1/80)..... 15

第8図 真行寺廃寺跡出土の軒丸瓦(1/2)

17

第9図 真行寺廃寺跡出土の平瓦(1/4)

18

第10図 真行寺廃寺跡出土の瓦塔(1/3)

21

第11図 真行寺廃寺跡出土の土器およびその他の遺物(1/3・1/1).... 23

図版目次

- 図版 1 遺 構 1. 金堂南掘立柱建物群（北から）
- 図版 2 金堂南東調査区 2. 金堂東掘立柱穴群（南東から）
1. 発掘風景（西から）
2. 柱穴群（北から）
3. 製鉄遺構（北から）
4. 製鉄遺構遺物出土状況（北東から）
- 図版 3 遺 物 1～2. 軒丸瓦
3～8. 特殊叩き目平瓦（凸面）
- 図版 4 遺 物 1～3. 瓦塔片
4. 墨書き土器
5. 鉢
6. ふいご羽口
- 図版 5 北基壇(講堂跡) 1. 南東隅部瓦積み（北西から）
2. 南縁東部瓦積み（北東から）
3. 南縁トレンチ東部瓦積み（南から）
- 図版 6 南基壇(金堂跡) 1. 北東隅部（南から）
2. 北東隅部（北西から）
3. 南西隅部（北東から）

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境

真行寺廃寺跡の調査は、千葉県教育委員会が実施している古代寺院跡確認調査の一環として、前年度（昭和56年12月）に、財団法人千葉県文化財センターに委託して行われた。発掘調査は、規模・時代等を把握して、その保存策を講ずる基礎資料を得るという目的で行われた。その成果は、昭和57年3月刊行の『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』で詳細に報告されている。同様に、遺跡の位置と環境、真行寺の沿革、研究史についてもそのなかで詳細に報告されている。ここでは、上記内容については、重複をさけるため、若干の付け足し的記述にとどめることとする。

本廃寺跡は、千葉県山武郡成東町565番地他に所在する。地目は杉林、植木畠および畠地である。

小河川である境川は、山武町横田方面から小支谷を形成しながら、九十九里海岸平野に出、太平洋へと流入する。本廃寺跡は、境川の東側の洪積台地上に位置し、南側には九十九里海岸平野を望む。また、現在の海岸線から直線距離で約9km隔たっており、原始、古代の遺跡もこの台地上に点在する。この台地の標高は45m前後であり、低地との比高は35~40mを測る。他廃寺跡としては境川上流約5kmに埴谷横宿廃寺跡が、本廃寺跡の北約2.2kmに小川廃寺跡が、また、南西約3kmに湯坂廃寺跡が、比較的近距離に所在する。また、周辺には真行寺古墳群が所在し、円筒埴輪片および形象埴輪片が表採されているのも注意される。

2. 前年度調査成果の概要

前年度（昭和56年12月）の発掘調査において確認された遺構中本廃寺跡に関連するものとしては、南北両基壇、掘立柱穴跡があげられる。その他としては、弥生時代後期・鬼高期・国分期に属する竪穴住居跡が合計10軒確認された。

南基壇（金堂跡）は、植木および農道下のために北西部と南東部が未検出の

状態であるが、規模は東西15.5m、南北12.0～12.5mを測り、復元主軸方位は座標北に対して2～3度西偏することが確認された。

北基壇（講堂跡）は、検出状況は良好であり、規模は、北辺長22.5m、東辺長13.8m、南辺長22.6m、西辺長14.0mと計測され、主軸方位は座標北に対して6度西偏することが確認された。また、基壇側縁には瓦積みが確認されており、外周には暗褐色の粘質砂層が被覆されていた。

この南北両基壇については、計測の結果若干の歪みが認められるものの誤差はわずかなものであり、厳密な施工が行われていたと思われる。

掘立柱穴は、北基壇の北側20～30mの範囲で確認されている。これは、北基壇に近接している点からして本庵寺跡に関連した何らかの施設と考えられるが、詳細については不明である。

出土遺物としては、瓦溜り、瓦片集積として多量の古瓦片が出土し、若干の土器、鉄釘などがあげられる。

ぼう大な量の瓦片のうち、軒先瓦はきわめて僅少で、大多数は男瓦と格子・平行・繩、そして無文の女瓦片であった。

鎧瓦は、八葉複弁蓮華文、素文縁十三葉素弁蓮華文、素文縁蓮華文の3種が出土した。

また、瓦溜り内から三重弧重廟文の字瓦が出土した。

女瓦については、前記のものに加えて、四葉花弁、宝相華文風文様十渦巻文山型文、渦巻文と小四弁花文を基調とするもの等、バラエティーにとんだ叩き目文が存在することが明らかとなった。

このように、前年度調査は、南北両基壇の構造、規模がほぼ明確に把握され、また、大和紀寺系の鎧瓦をはじめ多量の遺物が出土し多大な成果を上げることができた。

以上、前年度調査報告書から、抜粋的に記述したが、このような多大な成果をふまえ、今年度（昭和57年12月）は塔・中門の存否および、寺域の確定を主眼として、前年度未調査部分である南基壇（金堂跡）の南側、南基壇（金堂跡）の東側、および、南東側の畠地にグリッドを設定して発掘調査を行った。



第1図 真行寺廃寺跡の位置と周辺の古代寺院跡分布図 (1/50,000)

——この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図(東金)を使用したものである——

II 調査経過

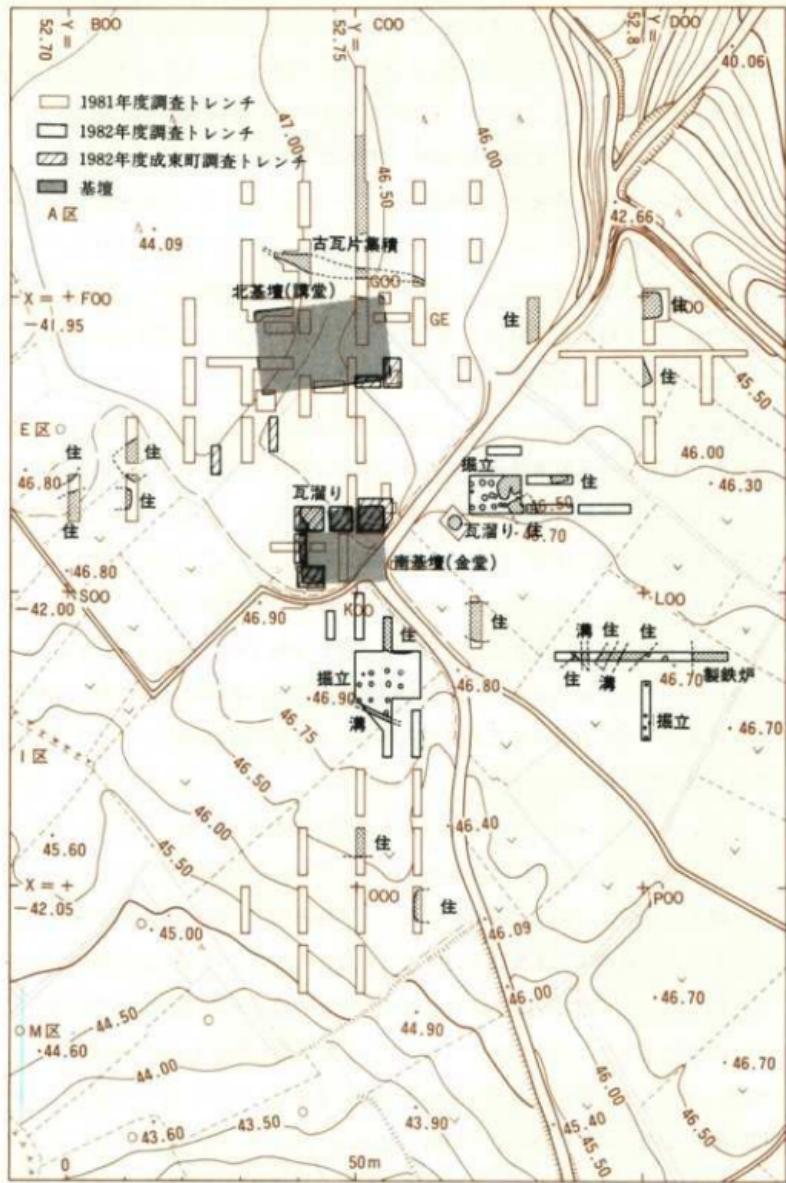
1. 調査に至るまでの経過

千葉県文化財センターは、昭和49年11月の設立以来数多くの調査研究活動を実施してきた。開発に伴う記録保存調査がその主なものであったが、一方で独自の研究事業も行ってきており、相応の成果を得てきている。中でも、「千葉県文化財センター研究紀要」は昨年までに7冊を上梓し、一定の評価を得ているところである。

今年度から、新しい試みとして、研究事業の一環として研究発掘調査を実施することになった。開発に伴う事前調査でなく、独自の目的をもった調査を実施し、今後の調査研究に役立てようとするものである。予算については当センターの研究事業費により充当することとした。

対象遺跡の選定には諸案があった。どれも捨てがたいものであったが、予算面の制約もあり、対象は自ずと限定されることとなった。すなわち、当センターの通常の調査においては、1/500程度の精密な地形図（通常事業者より提供される）を用意したうえで、公共座標に基づく基準測量を行いグリッドを設定しているが、この測量にはかなりの経費を必要とする。今回の予算では対応しきれない額といえる。当センターの調査精度を維持するためには、すでに地形図や測量成果の用意されている遺跡であることが不可欠であった。また、そのうえに遺跡の歴史的意義が大きいことも、当然の条件である。

このような条件を備えた遺跡として、山武郡成東町の真行寺廃寺跡が対象として選定された。同廃寺跡の調査は昭和56年度に、県教育委員会が実施中の重要遺跡確認調査（古代寺院跡）の第2年次の事業として行われ、金堂跡及び瓦積基壇を有する講堂跡が検出された。出土古瓦にも見るべきものがあり、大和紀寺の所用瓦に類する鎧瓦や、特殊な叩き目を有する女瓦の出土は注目された。これらから、本寺が7世紀末頃に創建された、県下でも有数の規模をもつ初期寺院と判明した。また、考古学的には9世紀頃まで存続したことが判明したが



第2図 トレンチ配置状況及び遺構検出状況全体図(1/1,000)

地元真行寺地区に伝存する鎌倉期の善光寺式三尊像（県指定有形文化財）や、山辺家文書に伝えられる中、近世の「真行寺」の様相から、本庵寺と明治初頭まで存続した珍宝山真行寺との一系的関係が推察され、興味深いものがあった。

ただし、この調査では畠作物の関係で掘れない地域がかなりあり、塔や門という、伽藍の重要な構成要素を確認できていなかった。また、講堂北方の林中のトレンチで、掘立柱穴のごときピットを確認しているが、その性格を十分究めることはできなかった。

このような未確認の部分があり、なおかつ全体の遺跡の重要度のきわめて高いことは、今回の調査対象として相応しいものと考えられた。精細な地形図及び測量成果簿が用意されている点も好ましく思われた。

県教育委員会の重要遺跡確認調査は、昭和57年度も当センターが実施機関として定められ、下総町名木庵寺跡の調査が実施された。今後も当センターで古代寺院跡確認調査を継続する見込みである。そうであれば、全事業終了後、総合的な成果報告をまとめることは意義深く、また当然要請される作業と思われる。将来のこのような事業をも予測して、真行寺庵寺跡の補足調査を位置づけてみれば、その意義はより増大するものと思われる。名木庵寺跡など、今後の調査対象についても適宜補足調査を実施し、単年度の確認ではカバーできない部分を調査して行きたいと考える。

このように考え、真行寺庵寺跡の第2次確認調査を今回実施することとした。たまたま、成東町教育委員会は本庵寺保存のため、金堂跡を中心に植えられていた植木の移植に伴う確認調査を計画し、早稲田大学考古学研究室に調査を委託した。この調査は国庫補助をうけて行われるもので、対象区域も当初から限定されていたが、昨年度確認成果を参考とする必要があり、昨年度担当の沼沢がこの調査に助力することになった。このような意味もあり、両者の調査は同時期に行うこととなり、周辺の畠作物（主に落花生）のとり入れを待って、昭和57年12月10日より現地作業を開始した。

今回の真行寺庵寺調査は、すでに述べたように塔及び門の存否、位置の確認という点に主眼をおいて行った。

2. 調査の経過

今回の調査も、昨年同様畠作物の関係、また成東町調査との調整などから、年度もかなりおしつまつた12月の調査となり、やや無理なスケジュールで報告書刊行までにこぎつけなければならなかった。

12月10(金)、発掘用資材の搬入、テント設営など環境整備を開始。

12月11(土)、クイ打ちグリッド設定に着手。

12月13日(月)、滝口先生来跡をまって発掘に着手。金堂正面の畠に南北トレーニチを設定し、門跡の検出につとめる。K22トレーニチで瓦塔片が1点出土。

12月14日(火)、金堂南側地区のトレーニチ増設、また金堂東側畠に東西トレーニチを設定し、回廊・築地跡等の検出につとめる。1か所で砂質土層があらわれたので拡張にかかる（後に、この砂層は住居跡覆土と判明）。G56グリッドでも瓦塔片が1点出土した。

12月15日(火)、金堂南及び東の地区でともに掘立柱穴様のピットを検出。この後、このピットの配列を見るため、同地区の可能な限りの拡張にかかる。

12月18日(土)、金堂東地区の拡張終了、東西棟建物跡1棟を確認した。その他にも柱穴があり、また拡張区北東隅部に落ちこみが認められたが、これらの精査は後日を記すこととした。

12月20日(月)、金堂東南部地区に、寺域外部を画す溝などの有無を確認するためのトレーニチを設定。その後、住居跡、掘立柱穴のほか、鍛冶工房とみられる竪穴を検出した。工房跡は一部のトレーニチ発掘しかできなかつたが、通有の住居跡とはまったく異なる構造をもつものであり注目された。これも、後日を期して精査すべき遺構である。

12月24日(金)、金堂南の地区の拡張はすでに終了していたが、この日かつての農道跡とみられる数条の貼り床状の面（時期不明）を思いきってとりのぞいたところ、下から掘立柱穴数個が検出され、柱穴の配列がよくわかるようになつた。

調査の終盤は記録の作成におわれ、また埋めもどし作業に意外に時間をとられたが、各作業員の努力により、12月28日で調査を終了した。

III 検出遺構

1. 金堂南掘立建物群

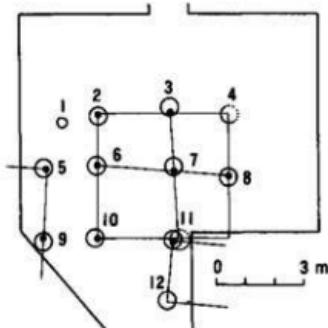
調査区域は門、回廊があると目されたところであったが、残念ながらそれらに関連する遺構を確認できなかった。調査の方法は、トレンチで確認した柱穴の広がりを見るために、順次トレンチを拡張した。そして確認した柱穴の上面を浅く掘り下げ、柱痕跡を確認してまた埋め戻した。

検出した建物群は、どれも十分に拡張しきれなかったので全容は不明だが、およそ3棟の建物群であることがわかった。なお、調査中遺物の取り上げや記録等を行うときの混乱を避けるために、個々の柱穴に1~12の番号を付けて対処した。ここでもその柱穴番号にしたがって記述する。

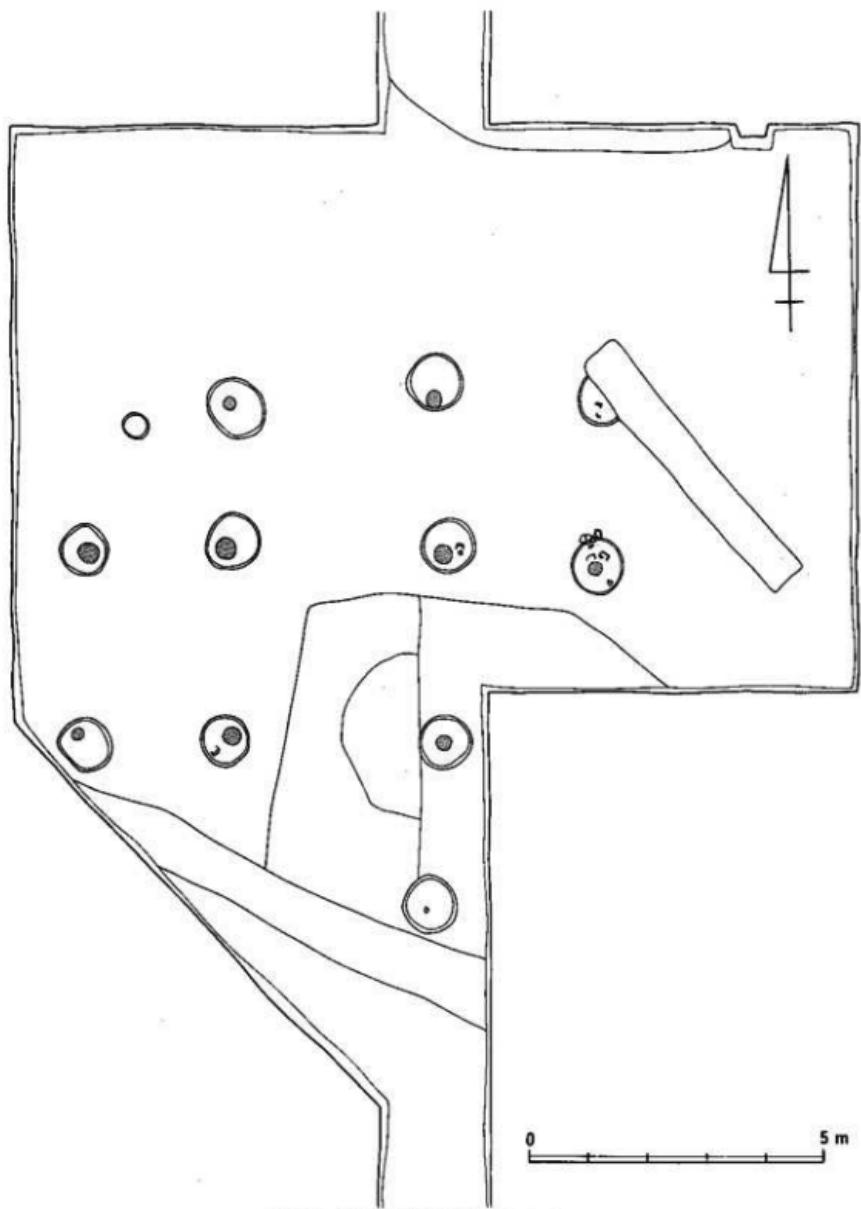
調査区中央にあるのは方2間、総柱の掘立柱建物跡である。南東隅の柱穴は調査区域外となり、その隣りの柱穴も性格不明の落込みによって切られ未検出である。柱間寸法はかなり不ぞろいで、西の間は2.6m、東の間は2mと西の間が大きく、柱筋も直交していない。埋土は数cmのわりと大きなロームブロックを含む茶褐色をした土で、6・8・10には埋土上面に焼土粒が認められた。柱痕跡は径15~30cmを測り、柱穴内のその位置は一定していない。試みにボーリング棒で深さを測ったところ、30~45cmぐらいであった。4・7・8・10の柱穴は版築の際に平瓦片を乱雑に詰め込んで、搗き固めたものである。平瓦は正格子叩き目が多い。

その南に検出した11・12の柱穴は桁行1間、梁行はさらに東へのびる。埋土は暗褐色土。11では径20cmの柱痕跡を確認できた。また11の版築土の上面からかわらけ様の土師質土器が出土した。

調査区西側で検出した5・9の柱穴は、



第3図 遺構配置図(1/200)



第4図 金堂南掘立柱建物群実測図(1/80)

まだ東と南へのびる建物跡である。埋土は茶褐色土、上面に若干焼土粒が確認された。深さをやはりボーリング棒で測ったところ、30~45cmぐらいであった。5の柱痕跡は径30cm、9は20cm。埋土の状態は総柱建物のものと以てゐるが、ロームブロックをそれほど含んでいない。

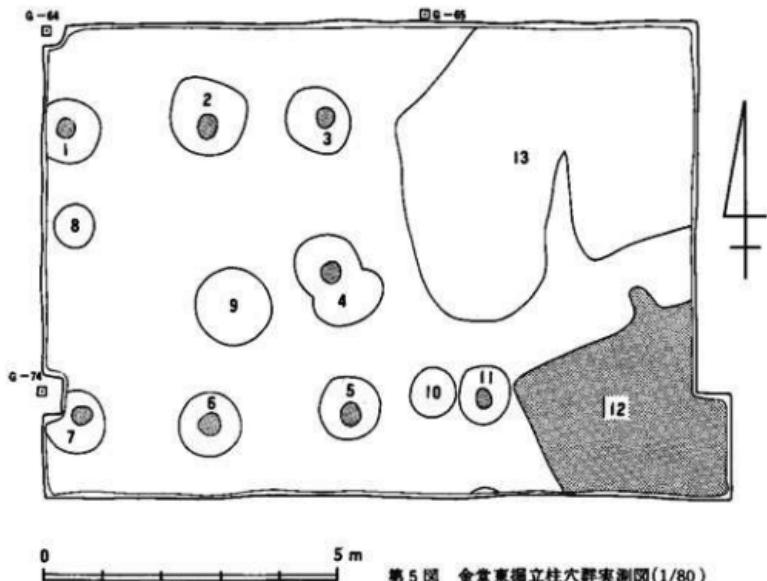
これらのことから、総柱建物跡とその南側の建物跡とでは、前者が先行する。それぞれの帰属時期についてこれといった決め手はないが、総柱建物跡から特殊叩き目の平瓦が1点も出土しなかったので、その下限は講堂修築時と推測される。寺院の機能の一部をはたしていたのであろう。それに対して、11・12の建物跡はそれよりかなり遅れ、寺院と直接関係したものかどうかわからない。

2. 金堂東側掘立柱穴群

本遺構は、G-64・G65・G-74・G-75グリッドにて検出された。金堂より約20m東側に位置する。合計11の柱穴が認められたが、掘立柱建物跡として構成できる柱穴は1~7で、8~11は直接の関連性は認められない。また、検出された11柱穴中3柱穴は柱痕跡が認められず、瓦片が集中する。掘立柱建物跡の構造は桁行3間、梁行2間の10本柱を持つ長方形を呈すと思われるが、西辺の3本柱穴をのぞいた7本柱穴を確認するにとどまったため、正確に判断はできない。建物方位は、東側梁行で真北に対し約4度西偏する。柱間寸法は1.33m~1.80mをはかり、かなり不ぞろいである。柱穴の形状は、やや不正な円形、楕円形、不正な隅丸方形などが認められ、径は80~102cmをはかる。柱痕跡の形状は、円形・楕円形が認められ、径は25~32cmをはかる。深さは、試みにボーリングステッキではかたが30~45cmと不均一であることがわかった。柱穴の埋土状態は極めて多量のロームブロックとローム粒よりなり、若干の炭化物粒を含み、黄褐色を呈す。また、柱痕跡は多量のローム粒を含み、しまりはなくやわらかで、暗褐色を呈す。このように、掘立柱建物を構成する柱穴は埋土状態で若干の均一性が認められるが、全体的にみてみると不均一である。

4の柱穴は、瓦片が集中する柱穴と重複しており、正確な形状は判断しがたい。

8・9・10は柱痕跡が認められず、形状はほぼ円形の柱穴である。径はそれぞれ、57cm、103cm、65cmをはかる。埋土状態は、8は黒褐色を呈し多量



第5図 金堂東掘立柱穴群実測図(1/80)

のロームブロックとローム粒を不均一に含み、しまりはなくやわらかである。9は暗黄褐色を呈し多量のローム粒と若干の炭化物粒が含まれており、しまりはなくやわらかい。また、8・10に比較すると、多量の瓦片が集中している。10は黒褐色を呈し多量のローム粒と若干大き目の炭化物粒が含まれており、しまりはなくやわらかい。

11は、1～7の柱穴同様柱痕跡が認められ、埋土状態も同じであるが、先に述べた掘立柱建物跡との関連性はないと思われる。しかし、そのすぐ南側に柱穴らしき落ち込みが一部検出されているので、それと対応して別の掘立柱建物跡を構成する可能性もある。

12は住居跡であり、北西コーナーとG-76グリッドで南東コーナーが検出された。平面プランは方形を呈し、北壁にカマドを有す。時期は不明であるが、周辺で国分期に比定される土器片の出土をみている。

13は黒褐色を呈す不明遺構であるが、瓦片を多量に含んでいる。

3. その他の検出遺構

第6図は、金堂の南東側に1.5m幅で東西30mにわたって設定したトレントを10mごとに3等分したものである。このトレントは寺域を画する溝の検出と、塔の存否を確認するために設定した。また、このトレントはグリッド数では、K-27~K-29, L-20~L-22グリッドの6グリッドによぶ。

検出遺構としては、柱穴2基、溝状遺構2条、住居跡3軒、製鉄炉跡1基、不明土壙1基があげられる。

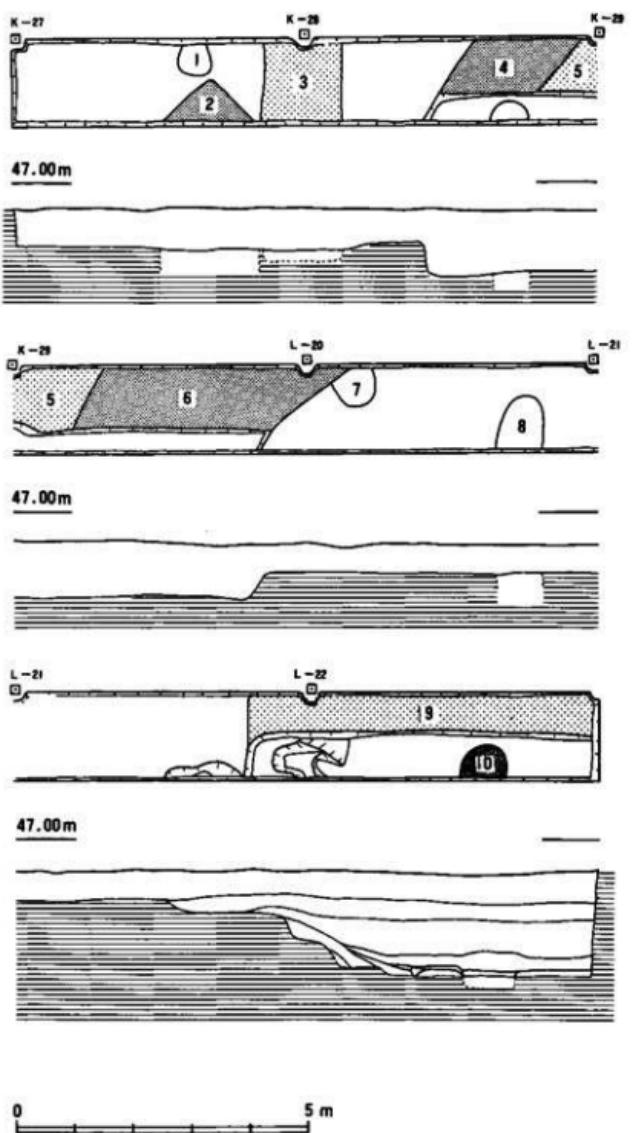
柱穴 1. 確認面より30cm程度掘り込まれており、柱痕跡は認められない。やや不正な橢円形を呈し短径55cmをはかる。埋土状態は暗褐色を呈し、ローム粒を少量含み、しまりはなくやわらかい。瓦片などの出土は認められない。

7. 確認面より40cm程掘り込まれており、1と同様に柱痕跡は認められない。橢円形を呈すと思われるが、6の住居跡と重複しており正確な形状はわからない。埋土状態は暗褐色を呈し、少量のローム粒と炭化物粒および焼土粒を含む。しまりは良く、1に比較すると固くしまっている。

溝状遺構 3. 確認面は2の住居跡確認面より10cm前後上である。溝幅は140cm、深さは20cm程度と浅く、南北に走る。埋土状態は黒色を呈し、ローム粒は全く含まず、若干のしまりはあるがやわらかい。遺物の出土は瓦片と土師器片、須恵器片が少量認められるだけである。

5. 3と同様に確認面は10cm前後上である。溝幅は1.5~2m、深さは中央部で40cm前後をはかり、北東から南西に走る。4と6の住居跡との切り合い状態および住居跡の先後関係をつかむべく、南側に東西のサブトレントを設定し、住居跡床面まで掘り下げた。その結果、住居跡の覆土をレンズ状に切り込んで構築されていることがわかった。出土遺物は、土師器片、須恵器片、瓦片の順で、他に少量ではあるが鉄滓も認められた。

住居跡 2. 方形の住居跡のコーナー部分が検出された。深さは確認面より50cm前後をはかり、床面は固くしまっている。埋土状態は暗褐色を呈し、ローム粒、炭化物粒に少量の焼土粒を含む。時期は不明であるが、周辺に国分期に比定される土器片が集中することにより、この時期に属するものと思われる。



第6図 金堂南東御道検出状況図(1/80)

4. 方形のプランを呈す住居跡である。サブトレンチを入れて掘り下げた結果、50cm前後掘り込まれて構築されており、床面は固くしまっている。また、この住居跡にともなう柱穴が確認され、床面より約40cm掘り込まれていることがわかった。この柱穴の東側には2つの粘土塊が床面上に認められた。また、床面上には正位の状態で、完形の小型鉢形土器（第11図2）の出土をみた。これらは、4の住居跡にともなうものである。時期は国分期に属すると思われる。

6. 方形のプランを呈す住居跡である。4と同様に50cm前後掘り込まれており床面は固くしまっている。4との先後関係は、サブトレンチを入れて掘り下げた結果、6が先行することがわかった。床面上の遺物は認められなかったが覆土中より国分期の土器片と少量の鬼高窓に比定される土器片と須恵器片の出土をみた。時期は不明であるが鬼高窓以降の構築と考えられる。

製鉄炉跡 9. 現表土より約50cm掘り込んで検出された溝状の掘り込みである。埋土状態は黒褐色を呈し、若干の粘性をおびる。また、焼土粒や炭化物粒が若干ではあるが認められた。この性格をつかむべく、南側に幅80cmで東西にサブトレンチを設定して掘り下げた。その結果、確認面より約1.3mの最底部に製鉄炉跡1基が検出された。また、覆土中には多量の鐵滓、土器片が出土したが、その中でも銅製品（第11図6）の出土が注意される。サブトレンチ西側では、斜面が2段のテラス状を呈し、比較的急傾斜をもち底部へと至る。テラスより20cm前後浮いた状態で墨書き土器（第11図1）が出土し、テラス直上では椀形鐵滓2点が出土した。しかし、東側の立ち上がりが検出されなかった点で、この掘り込みの規模は不明であるが、最底部で製鉄炉跡が検出された事により、製鉄に関連した掘り込みとすることができる。

10. 楕円形を呈す製鉄炉跡である。焼土が全体に認められ、若干の鐵滓が含まれる。20cm前後掘り込まれており、底面には鐵滓が認められる。炉跡直上面ではふいごの羽口片（第11図5）1点と椀形鐵滓が出土した。椀形鐵滓は合計3点出土した。

L-30・L-40グリッド検出遺構 金堂の南東側の畠地に南北に設定したトレンチである。L-30、L-40グリッドを基本とし、幅1.5m、長さ10mで寺

域の確認を目的に設定した。先にのべた東西30mのトレンチのほぼ中央から南へ5mの位置にあたる。

検出遺構としては、柱穴5基のみにとどまった。そのうち、柱痕跡が認められるものが2基で他の3基には認められない。

1. 確認プランは楕円形を呈し、長径60cm、短径47cmをはかる。柱痕跡は認められず、埋土状態は暗褐色を呈しローム粒を少量含みしまりはなくやわらかい。深さは40cm前後である。

2. やや不正の円形を呈し、径58cmをはかる。柱痕跡は認められず、埋土状態は大粒のロームブロックを多量に含み暗黄褐色を呈す。

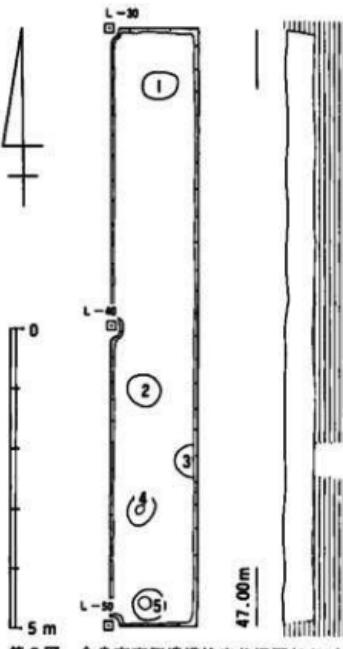
3. 確認プランは円形を呈す。柱痕跡は認められず、埋土状態はロームブロックを多量に含み、暗黄褐色を呈す。深さは50cm前後とやや深い。

4. 確認プラン楕円形で長径56cm、短径46cmをはかり埋土状態はローム粒を含み暗褐色を呈す。柱痕跡は楕円形を呈し長径20cm、短径14cmをはかる。深さは40cm前後である。

5. 確認プランは円形で径58cmをはかり、埋土状態はローム粒を含み暗褐色を呈す。柱痕跡は円形を呈し径22cmをはかる。埋土状態は若干の焼土粒を含み明褐色を呈す。

2, 4, 5は、南北に等間隔で直列し、これにより掘立柱建物跡が構成されるようである。

また、3の存在もあるので、この地区での掘立柱建物跡は2棟以上構築された可能性が認められよう。



第7図 金堂南東側遺構検出状況図(1/80)

IV 出土遺物

1. 出土遺物の概要

今回の調査は前述のように、寺院の中心部からはずれていたために、前回の調査ほど遺物の出土量は多くない。それでも十分な整理期間がなかったためにすべての出土遺物を十分観察するわけにはいかなかった。不十分な点は、後日機会を改めて補正したいと思っている。

寺跡には欠くことのできない瓦類は今回もかなり出土したが、小破片が多く完形品は1点もなかった。年代決定の決め手ともなる軒瓦は、図示した2点の軒丸瓦が出土しただけである。前回の報告でも指摘されているように、丸・平瓦に対する軒瓦の出土比率が余りにも低過ぎる。

調査中、軒瓦と特殊叩き目の平瓦については、とくに注意して抽出するよう心がけたため、特殊叩き目の平瓦はわりと多くのものを図示できた。それ以外の瓦には、行基丸瓦と各種の叩き目の平瓦があった。行基丸瓦は叩き板を使用せずに成形し、ナデ調整で仕上げてある。平瓦の叩き目には、正斜格子目、繩目、平行目などがあり、かなり細分することができそうだ。なかでも格子目やナデ調整で仕上げた平瓦には、桶巻作りと一枚作りの両技法が確実に存在する。本廃寺跡のどの時点で、その技術的な転換がはかられたのか、今後の課題の一つといえよう。

土器類は、弥生時代後期から歴史時代のものまであり、かなりの量の破片が出土した。大半を占めるのは、本廃寺跡にもっとも関連した時期に相当する国分期のものである。なかでも第11図1は製鉄遺構の下限を示す好資料である。

それから目についた遺物として瓦塔の破片がある。

これらの遺物のほとんどは、耕作土中より出土したもので、現段階では直接寺の存続年代を決定する要素とはなり得ないが、今後綿密な分析が加えられれば、その巾をすい分せばめることができるだろう。

2. 瓦

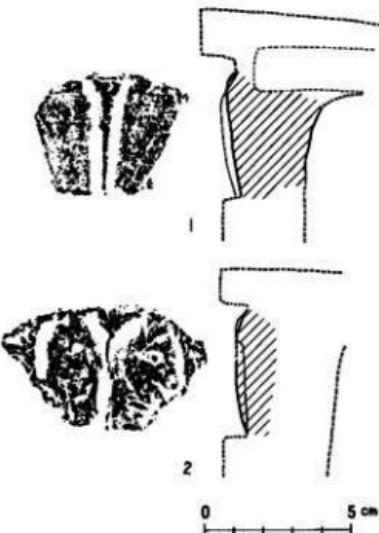
軒丸瓦 第8図の2点の軒丸瓦は、前回報告されたものと同種のものである。1は単弁13弁、中房の蓮子は $1+6$ になる。間弁は細長く中房に達する。蓮弁わきの不整な凸線は、范の彫り直しの際に生じたものである。丸瓦部は瓦当裏面に溝をつけて接合してある。2は単弁14弁軒丸瓦の蓮弁部の破片である。中房が完全に残る良好な遺例がないため、蓮子の数は不明である。

今回の調査では残念ながら軒平瓦は出土しなかった。

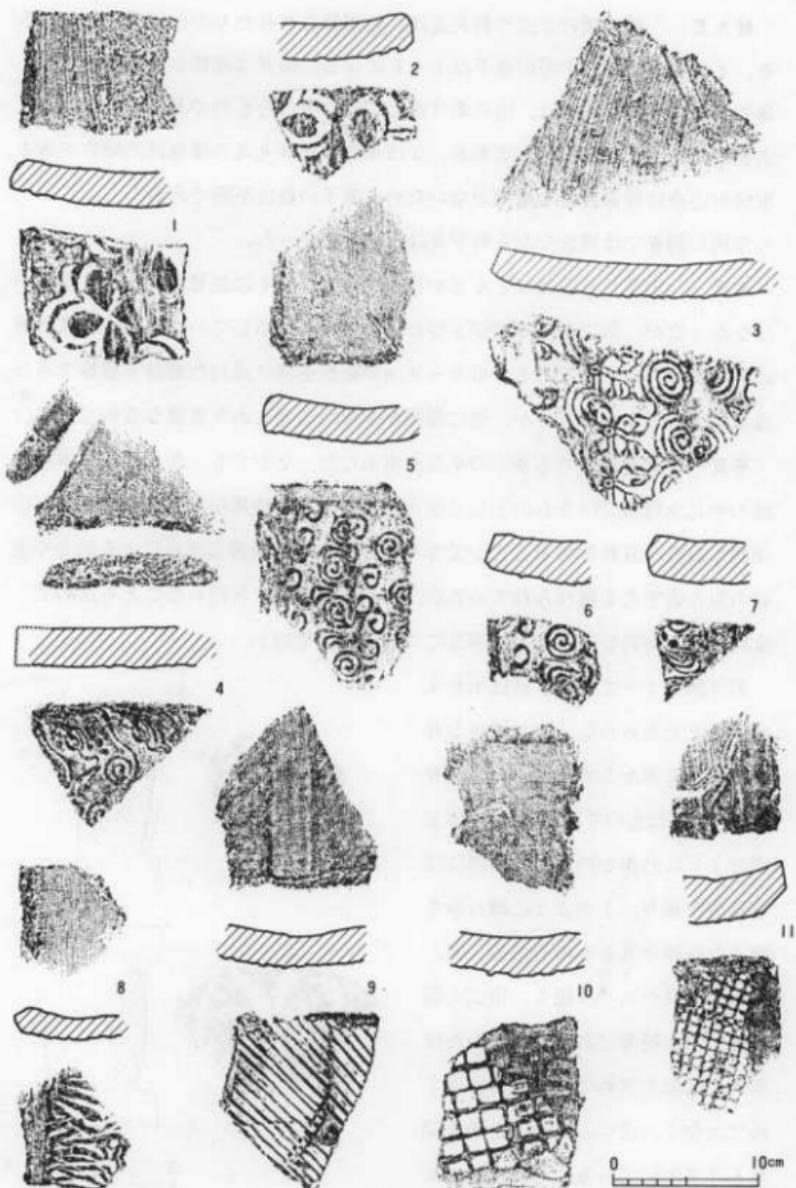
丸瓦 出土したのはほとんどが行基丸瓦で、とくに注目されるようなものはなかったが、気にかかる例が1つだけあった。図示していないが、丸瓦凹面に枠板痕があるものである。巾2~3cmの細板を横に連ねた痕跡を観察できた。^{註1)} 数量はさしてないようだが、他に類例が少ないと貴重な資料である。

平瓦 今回の調査でも多くの平瓦が出土した。なかでも、かねてより本廃寺跡の平瓦を特徴づけるものとして注目されてきた、特異な叩き目をもつ平瓦は今回も良好な資料を得ることができた。これらは安藤鴻基氏による紹介や前回の報告書中でも触れているが、ここでは2、3気付いたことも含めて、改めてこの特異な叩きをもつ平瓦について述べておく。^{註2)}

第9図の1・2の叩き目は単弁4弁蓮華文をあらわし、少し狭長な弁とそれより短かくてすんぐりした弁を対においていたものである。蓮弁全体を囲むように凸線がめぐる。凹面には布目痕が残り、1のように離れ砂を撒いた痕跡の残るものもある。側、端面のヘラケズリは粗く、巾広く削り落すのが特徴である。叩きかたは素地の表面を埋めつくすように叩くのではなく、ぼつんぼつんとすき間をあけて叩いている。そのために文様どうしが重なる部分も少ない。そ



第9図 真行寺廃寺跡出土の軒丸瓦(1/2)



第9図 真行寺廃寺跡出土の平瓦(1/4)

して叩きを行う前には、かららずナデ調整してある。叩きをするまでに十分成形は終わっているのである。これは叩くという行為が通常の叩き締めほどの効果のないことを示している。この場合の叩きは副次的な意味あいが強い。

3は4弁対葉花文と4重の渦巻文との複合叩き目である。側縁がわずかに残る、わりと大きい破片である。対葉花文は8世紀の中央官衙の組織内を中心に好んで使われているが、本例の文様はかなり稚拙で後出的である。

4～9は今までっとも多く出土している叩き目である。これもやはり複合叩き目で、少なくとも5つの単位文様を叩き板に彫ったものである。単位文様のうち渦巻文の一部に板のキズが出ている。それはこの種の瓦のすべてにある。そこでこの渦巻文を中心に個々の文様をつなぎ合せていくと、渦巻文・蕨手文・4弁花文・鎌状文・飛雲状文の5つの文様となる。したがってこれらはすべて1つの叩き板によって作られたことになる。個々の単位文様には関連性がなく意味するところはわからない。

これらの叩いたあとにあらわれた文様をみていくと、叩いたときに文様が当然あらわれていなければいけないところにその文様があらわれていなかったり、1つの文様が接近してあらわれるという一見奇妙な現象がみられる。これは叩き板が平らでなく、ある曲率をもった板に文様を彫ったものであることを示している。渦巻文が比較的高い確率で出ているので、その部分が球面状になった板のもっとも突出した部分にあたっていたと思われる。これがもし平らな板なら、素地にあらわれた文様は前に叩いて出た文様を、叩き板の少なくとも1辺で切った痕跡があらわれてこなければならない。かりに瓦の曲率を考慮に入れても、最大曲率の線と平行に近い叩いた線はあらわれなければいけないであろう。

なお4は隅切平瓦で、斜側面を鋭利な刃物で切り落している。端面は未調整である。

8も複合叩き目で、正格子の枠の中に鳥様文をおく。その一部の破片である。これには8のように側面をなだらかにヘラケズリ調整するものと、2面をヘラケズリするものとがある。叩きかたは側縁に直角に板をあてるのを原則とする。

9以降は、通有の叩き目である。9は平行叩き目で、凹面に枠板痕が残る。叩き板は方形に近いものと思われる。

10はかなり目の粗い正格子叩き目である。端面のヘラケズリは巾広く粗い。

11はわりと細かい正格子叩き目で、側面の2面をヘラケズリする。布目痕が側縁近くで途切れるので、一枚作りであることがわかる。

特殊叩き目平瓦に関する問題点 第9図1~8の特殊叩き目平瓦は、昨年度の講堂瓦積基壇の調査成果から、本庵寺跡の瓦の中で最終段階に位置づけられる。これらは凹面の状況や曲率から、すでにいわれているように一枚作りによるものである。こうした特異な叩き目は、散発的に他の寺院でもみられるが、これほどまとまった例は余りない。ここではまだ組合う軒瓦も確認されていないので、年代をおさえることができず、寺の存続時期をいっそう不明確にしている。

1・2の単弁4弁蓮華文は、瓦当文様としたものに島根県四王寺・松の前庵寺の軒丸瓦がある。それらは大きな間弁をおき、文様は全体に平板である。本例にはない大きい間弁があるので、本例とはずい分異なった印象をうける。一方叩き板に4弁蓮華文を使ったものに高句麗の遺例といわれるものがかつて報告されている。^{註3)} それは細長い板に4弁蓮華文、その上下に斜格子目を彫ったもので、蓮弁の回りにやはり凸線がめぐり本例に酷似する。これと似たものはわが国でも出土している。福岡県浦の原池窯跡群出土のものと、それを搬入した平安京の例である。^{註4)} 平安京の編年ではこれらに10世紀後半~11世紀初頭の年代をあたえている。これがさきの高句麗遺例と直接関わるなら、逆に高句麗例を高麗の時期まで引き下げなければいけないであろう。

また前回報告されているものなかに高句麗の遺例と間接的に結びつくと思われるものがある。第11図3がそれで、類例が京都府北白川庵寺跡にある。^{註5)}

このように、これらの特殊叩き目は高句麗もしくは高麗の文化といくらかでもつながっているのではなかろうか。高句麗の平瓦の叩き目の特徴として、その叩き目が非常にバラエティーに富んだものであることが指摘されている。^{註6)} そうした点も、本庵寺跡の他の特殊叩き目の場合にあてはまるだろう。

類例も少ないためにいささか性急な結論づけをしてしまったが、とりあえず

これらの特殊叩き目平瓦については以上のように考えておきたい。年代については現段階で知るすべもないが、平安京の例も一応考慮にいれておく必要があるかもしれない。

3. 瓦塔片

第10図1・2・3は瓦塔片である。いずれも金堂南側の耕作地に設定したトレンチ内出土のものである。

1は瓦塔の側縁を構成するものである。建物の柱を模倣したものであり、縦に2本柱、横に1本の貫きが遺存している。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含む。

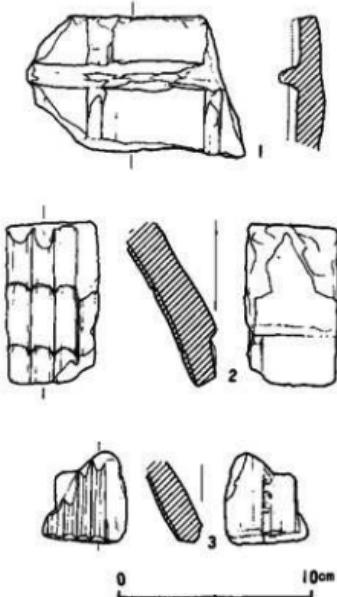
2は軒先部分の破片であり、4列分の丸瓦が上下方向に1ないし3段分遺存している。裏面には棟の表現が施されている。また、丸瓦以外の瓦の表現はなされていない。先端部には赤色塗彩が施されている。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒を多量に含む。

3は2同様に軒先部分の破片であり、4列分の男瓦が1段分遺存している。2に比較すると男瓦が若干小さく表現されており、同一のものではない。色調は灰白色を呈し、胎土には若干の砂粒を含む程度である。

今回の調査で出土した瓦塔片は以上の3点であるが、昨年の調査報告のなかで紹介されている瓦塔片と同一のものは2のみである。1と3は今回の調査ではじめての出土例となる。

4. その他の出土遺物

第11図1は金堂の南東側に設定した東西30mのトレンチより出土したものでグリッド番号ではL-22である。L-22グリッドで検出された製鉄遺構の西側斜面より約20cm浮いた状態で出土した。正位で出土し、口縁部から底部にかけ



第10図 真行寺廃寺跡出土の瓦塔(1/3)

ての3分の1を欠損する国分式の墨書き土器である。復元口径13.4cm、底径6.3cm、高さ4.1cmをはかる。墨書きは外面に上下二文字が認められる。成形方法としては、粘土紐を底部より左回りに積み上げ、のちにヘラ状工具で調整を行っている。内外面にはロクロ目が残り、底面には直交する二方向のヘラ削りが施されている。しかし、調整は雑で正位に置くとやや不安定感がのこる。底面調整後外面下半部は左から右へのヘラ削りが施されている。9世紀前半頃に比定される土器と推定される。

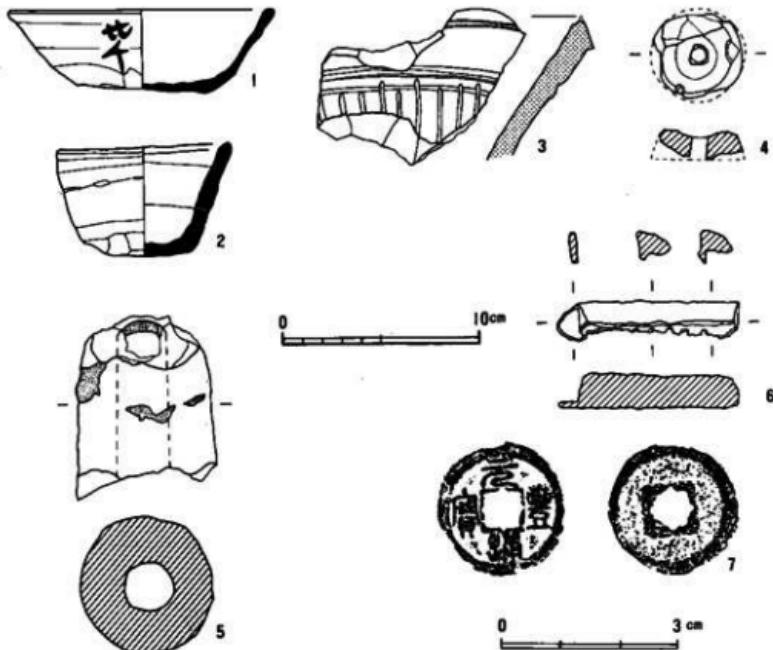
第11図2は、小型鉢形土器の完形品である。K-29グリッド検出の住居跡(第6図4)の床面直上より、正位の状態で出土したものである。口径8.7cm、高さ5.7cm、器厚は中位で0.7cmをはかる。内外面ともに明瞭な輪積み痕が残り、指頭による押捺で整形され、その後上半部には指撫で、底面およびその周縁部にはヘラ削り調整が施されている。底部の安定感は悪く、底面のほぼ全体にススが厚く付着している。胎土にはやや大粒の砂粒が含まれている。

第11図3は、K-28グリッド出土の須恵器甕の口縁部片である。外面口縁下には横位に沈線および一条の隆帯を有し、頸部には棒状工具による沈線が縦位に施される。内外面には自然釉が付着している。

第11図4は、L-22グリッド出土の石製紡錘車である。製鉄遺構の覆土上面より出土したもので、欠損部が多く遺存状態は悪い。安山岩製のものである。

第11図5は、L-22グリッド検出の製鉄炉跡確認面直上より出土したふいごの羽口片である。先端部は欠損し黄白色の溶解鉄が付着し、内面の一部までおよぶ。外面先端部には黒色のタールが全面に厚く付着している。これは炉に挿入されていたことによるものであろう。孔径は約2.5cmをはかるが、先端部によよんで若干小さくなる。

第11図6は、L-22グリッド検出の製鉄炉跡上30cm前後浮いた状態で出土した銅製品である。器肉の薄い部分には、ほぼ等間隔で9個の穴がえぐり込まれている。用途は不明であるが、何かのとめがね的要素を持つものと思われる。この銅製品は本庵寺および製鉄遺構に伴うものとすれば重要な位置をもつものであろう。



第11図 出土遺物実測図(1/3, 7のみ1/1)

第11図7は、G-55グリッド出土の宋銭である。「元豊通宝」であり、1078年に南宋で鋳造され、わが国では12~13世紀にかけて広まったものである。また、本廐寺跡出土の古銭はこれがはじめてである。

以上、その他の出土遺物として7点をみてきたが、ここに上げたものは発掘調査中目に付いたものだけを大まかにピックアップしておいたものである。この他にも多量の遺物の出土を見たが、今回は特に目に付いた遺物のみを上げることとした。

この他の遺物としては弥生式土器、土師器片、須恵器片、陶器片、埴輪片などの出土がある。なかでも土師器片は多量で、時期的には国分期に比定されるものが多く、鬼高期がそれに次ぐ。

このように不十分な点は多いが、後日機会を改めて詳細な遺物の観察などをを行い、補正していくこととしたい。

V ま と め

今回行った調査の主要な目的は、塔及び門の存否、位置を確認し、伽藍配置の様式を把握することにあった。また、寺域の外郭を画す溝等についても確認する必要があった。そしてその結果は、当初の目的にくらべやや不満足な面もあったが、一方で予期しない知見も得られ、一応の成功をおさめたと言える。

金堂南側の門の所在すると目される区域については、用地の関係から、中軸線上からやや東に片寄った部分しか掘れなかったが、掘立柱建物跡の存在を立証することができた。十分な拡張ができなかつたため不確実な面は否めず、所属時期もやや不確実であるが、掘り方内充填土の差などから2棟分の建物を復元することができる。発掘区西端は伽藍中軸線に近く、金堂基壇南縁からは16m程と、門が所在するに相応しい位置であり、検出された柱穴には門を構成する柱をうけるものが含まれている可能性もある。この区域では、長年の耕作の間も異常の認められたことはないと土地所有者の言であり、ポーリング探査によっても表土下はソフトローム層（ないし暗褐色土）になっているようであった。今回の発掘によても地山には何の変化も認められず、この区域に基壇の存する公算はきわめて低いものと判断される。おそらく門は掘立柱による建築であり、今回その一端にせまることができたと考える。

金堂東側でも掘立柱建物跡の所在が確認された。1棟はおそらく2間×3間程度の東西棟建物になるものと思われるが、これ以外にも不規則な配置で柱穴が認められ、拡張し精査すれば他の建物も復元し得るものと思われる。この区域の柱穴については表面観察のみで、内部の充填土をまったく除去していないため、所属時期、性格とも不明であるが、充填土表面に瓦片の露出したものもあり、寺院創立後の所産であることは間違ひなさそうである。検出位置や建物の方向性からみても、本寺に関係する施設と認めるのが妥当と思われる。

金堂南東の区域でも柱穴が検出されている。南北方向のトレンチ1本の範囲

内で確認しただけであり、もとより建物を復元することはできないが、柱穴の平面形や内部の充填土には他区域のそれと良く似たものがあり、同様の性格をもつ建物の存在を認めて良いであろう。

昨年度、講堂北方の区域で認められたものを含めると、これまでに金堂、講堂の周辺部4か所で掘立柱建物の所在を確認したことになる。いずれも時期、性格を十分把握するまで至っていないが、寺院成立後、寺院との関連で増設されていったものとみるのが最も妥当と考えられる。今後、個々の建物の正確な復元と、それらの配置をとらえることによって、主要伽藍との関係や、建物群の消長をたどることによって、本当の歴史をより多面的にとらえることが可能となろう。

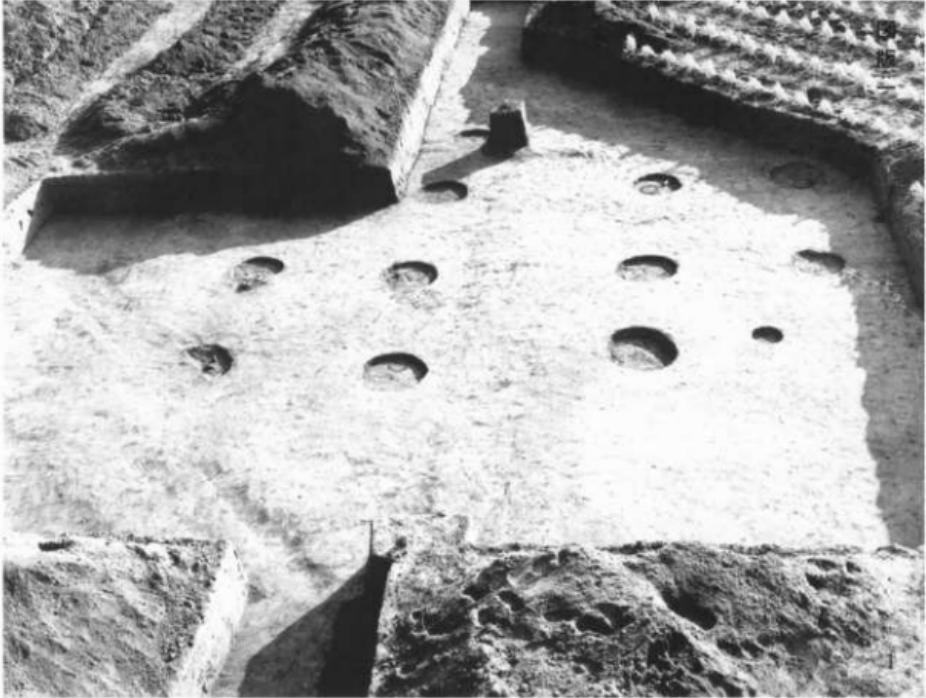
なお、塔の所在については作物の関係で十分トレンチを設定できなかったこともあり、今回も未確認でおわっている。塔の所在しそうなところは全面畠となっているが、長年の耕作の間に異状の認められた個所を聞き出すことはできなかった。未発掘部分もなお多いが、2年度にわたるトレンチ探査からの所見でも、塔基壇が存する可能性は少ないように感じられる。今回の調査で瓦塔片が検出されたことも、否定材料に含まれられよう。滝口宏先生の御説によれば、木造塔のかわりに瓦塔が代用されたのではないかとのことであり、ここでも事実がそのようであったと考えておきたい。

金堂南東の区域と確認された工房跡は注目される遺構である。鉄鍛冶の工房とみられるが、竪穴の掘りこみがきわめて深く、かなり大規模な構造をもつ。通有の竪穴住居跡内に鍛冶炉を置いた工房などにくらべ特異であり、専用の工房と認められる。その規模は、一般的の集落での需用を満たすには過大と思われ、寺院の存在を前提としてはじめて可能な設備投資と認められる。覆土内で銅製品が出土していることから、鉄鍛冶だけでなく、鋳銅に関与していた疑いもあり、今後の全面調査に期待したい。

以上のように、一定の成果と今後の課題を残して今回の調査は終了した。寺院の主要部だけでなく、周辺の諸遺構にも見るべきものがあり、それらの複合体としての真行寺廃寺跡の継続する調査が、今後も要請されていると言えよう。

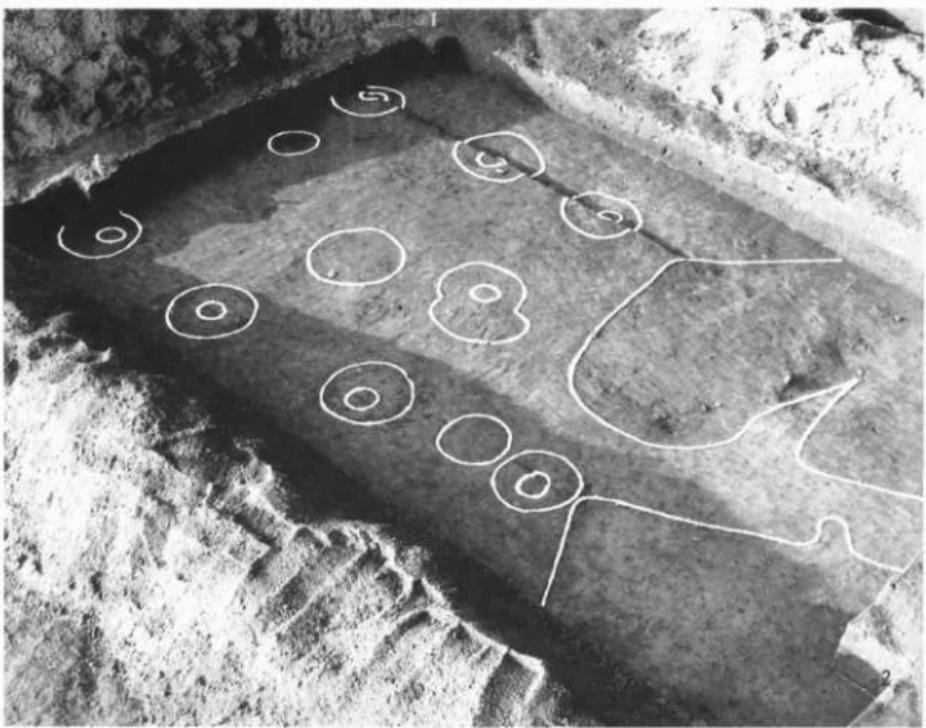
註

- 1 類例は豊後で多く出土している。東日本では群馬県上植木廃寺、福島県腰浜廃寺に類例がある。
- 2 安藤鴻基他「真行寺廃寺の古瓦」『古代房総史研究』第1号 昭和55年
- 3 「古墳調査特別報告」第5冊『朝鮮考古資料集成』12 昭和57年 P 62
- 4 九州歴史資料館編『九州古瓦図録』 柏書房 昭和56年
- 5 平安博物館編『平安京古瓦図録』 雄山閣 昭和55年
- 6 わが国の編年体系から、朝鮮半島の編年へ積極的にアプローチする試みもなされてい
る。上原真人「十一・十二世紀の瓦当文様の源流（上・下）」『古代文化』第32巻5・
6号 昭和55年
- 7 北白川廃寺発掘調査団「北白川廃寺塔跡発掘調査報告」 昭和51年
- 8 井内古文化研究室編『朝鮮瓦博図譜』Ⅸ 越説 昭和56年 P 33



1 金堂南掘立柱建物群

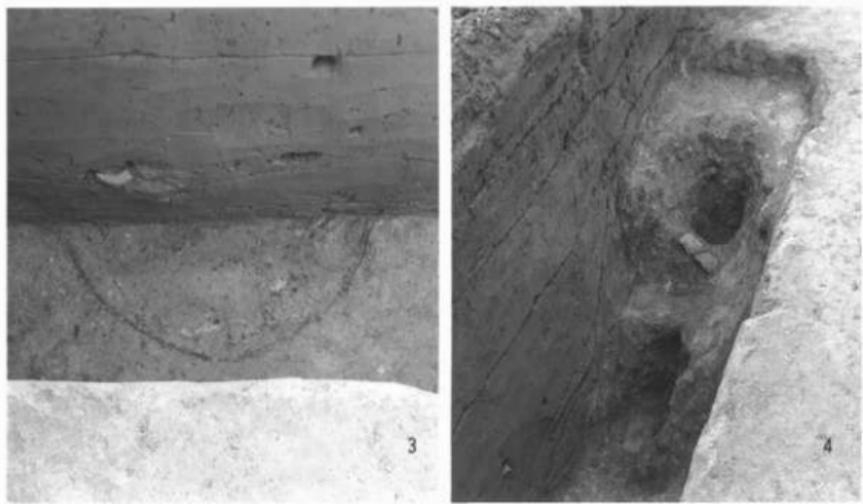
2 金堂東掘立柱穴群



金堂南東調査区

1 発掘調査風景
(西から)

2 柱穴群 (北から)

3 製鉄遺構
(北から)4 製鉄遺構
遺物出土
状況
(北東から)



1



2



3



6



4



7



5



8

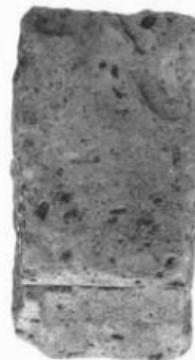
遺物 1・2 軒丸瓦 3～8 特殊叩き目平瓦（凸面）



1



2



3



1



4



1



5



6

遺物 1～3 瓦塔片 4 墨書土器 5 鉢 6 ふいご羽口

北基壇（講堂跡）

1 南東隅部瓦積み
(北西から)

1

2 南縁東部瓦積み
(北東から)

2

3 南縁トレンチ東部瓦積み
(南から)

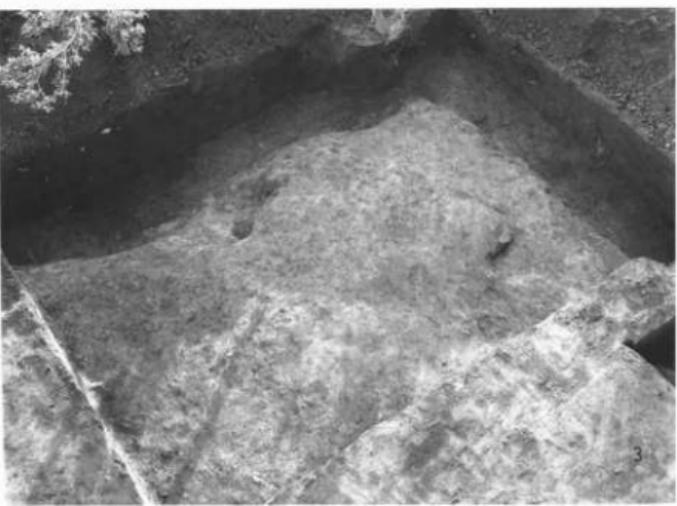
南基壇（金堂跡）



1 北東隅部（南から）



2 北東隅部（北西から）



3 南西隅部（北東から）

成東町真行寺廃寺跡研究調査概報

昭和58年3月31日発行

発行者 財團法人 千葉県文化財センター
千葉市亥鼻1丁目3番13号
電話 千葉(0472)25-6478

印刷所 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号
電話 千葉(0472)33-2235
